
宝島をつくる人

桃城まさる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝島をつくる人

【Nコード】

N8867Z

【作者名】

桃城まさる

【あらすじ】

宝島をつくる人の話。

高校時代の友人はこんなことを言った。

「今まで勉強してきたのは、この世界にはもう宝島はないってことを知るためだったんだな」

青い空の下だった。快晴だった。太陽の光が頬に痛かった。

そうだね、と私は相槌を打った。

「俺が今まで会った大人は、一人残らずみんな叫んでたよ。宝島なんかないんだって。探しても無駄なんだって。冒険する場所は、もうこの世界にはないんだって。夢なんか捨てちまえて。それが大人になることだって」

クソ喰らえだ、と友人は言った。唾も吐いた。

そうだね、と私は相槌を打った。おざなりではない。

「だから俺は教師になるよ」

なんで、と私は尋ねた。

「宝島はあるんだって、子供たちに教えるため」

そいつはいい、と私は言った。

そいつはいい。

「だろう」

友人は自慢げだった。

数年後に、友人は教師になった。

そしてさらに数年後に、友人は逮捕された。

なんで、と私は尋ねた。

細かい穴の開いたガラス越しに、友人は笑った。高校時代よりもだいぶ老けていた。髪の毛には白いものが混じっていた。

「俺は間違ってたよな？」
もちろん。

「頑張ったんだ。教えようとしたんだ。宝島はあるんだって。本当はあるんだって。他の大人たちは否定して馬鹿にして笑うだろうけど、本当はあるんだって。教えたんだ。生徒たちに。そしたら、捕まったよ」

違うだろう、と私は言った。

「そうさ。俺は生徒を殴ったんだ。分かってしなかったから。俺の話を信じようとしなかったから。あまつさえ、他の生徒をたぶらかそうとしたから。大人にしようとしていたから。俺はその生徒を殴ったんだ。そしたら、死んじゃったよ」

当たり所が悪かったんだ、と友人は泣いた。

そんなつもりじゃあなかったんだ。

そんなつもりじゃあ。

「なあ」

友人は泣きはらした瞳を私に向けた。

「宝島をつくってくれよ」

懇願だった。こんなにも真剣な人間の願望を、私ははじめて目の当たりにした。

「宝島をつくってくれよ。消えちまったんだよ。知ってたんだよ。俺、本当は知ってたんだよ。本当はないってこと。だから、つくってくれよ。俺を嘘つきにしないでくれよ。子供たちに夢を与えてくれよ。大人を子供にしてくれよ」

そいつはいい、と私は言った。

友人は笑った。

「約束だぞ」

ああ、と私は相槌を打った。おざなりではない。

「約束だからな」

友人は出所の同日に自殺した。
葬式には出た。涙は出なかった。
今じゃない。

金が必要だと思った。

何をするにも、先立つものが必要だと。

「それで、いくらほど入用で？」

生まれて初めて消費者金融に頼った。

とりあえず百万、と私はやたら人相の良い男に言った。

「印鑑は？」

ここに。

「保証人は？」

いない。

「他の人間には迷惑をかけたくないんだ」

「それでは無理です」

はつきりと、人相の良い男は言った。

「どうしても？」

「どうしても」

分かった、と私はソファに身体を沈めた。

「じゃあ、個人的に君から借りる」

「はあ？」

人相の良い男の名前は兼田と言った。

小さいながらも金融会社の責任者である。腕はある。金もそこそ

こある。

「なあ」

自分の眼光に自信があるわけじゃない。それでも可能な限り真摯に相手を見つめた。

今は亡き友人のように。

「宝島をつくらないか」

十年かかった。

兼田と一緒に株式投資に奔走し、百万を一億にまで増やした。最初に金を出したのは兼田である。私は自分で稼いだ分から百万を出して、兼田に返した。

「これで貸し借りはなしだ」

「寂しいよ」

金を返したとき、兼田はそう言った。

それでも私たちの関係は続いた。

土地が必要だと思った。

何かをつくるには土地が必要だ。

「どこの土地を買う？」

兼田がパソコンの画面を見ながら聞いた。

温かいところがいいな。

赤道付近。

「どうして？」

「宝島だもの」

なるほど、と兼田は真面目に言った。

一億のうちの五千万を出して、小さな小さな、A4の世界地図には印刷されないほど小さな、豆粒ほどの島を買った。

相応しい、と私と兼田は同時に言った。

ピクセルのぼやけた点でいい。

現代ならばそれでいい。

島を買ってから一年後に、現地に飛んだ。

ララバウという南米系の男性に案内されて、島へと上陸した。上陸にはボートを使う。無人島なので定期船は出ていない。

「ここで何をするつもりなんだい？」

ララバウは砂浜で私たちに聞いた。ララバウは通訳でもある。日本語は完璧だ。

私は説明した。

ララバウは笑った。

ララバウは大人だった。

友人がいたら殴っていただろう。私は殴らなかった。兼田も殴らなかった。捕まるのは今じゃない。

「今度来るときの案内役はもう決まっているかい？」

ララバウは尋ねた。

決まっていない、と兼田は答えた。

「俺を指名してくれよ」

お願いだよ、とララバウは言った。

泣き出しそうな顔だった。

「俺は子供に戻りたいんだ」

なるほど、と思った。

そいつはいい。

私はララバウと握手した。ララバウは兼田とも握手した。

五年かかった。

私と兼田とララバウは島を改造した。改造費に三千万がすつ飛んだ。

木の足りない場所には木を植えた。池が必要だと思った場所には池を作った。洞窟が欲しいと思ったので、それらしい洞窟を作った。

鍾乳洞は無理だった。自然の芸術には叶わない。先住民なんかいなかったが、先住民がいたような形跡を作った。加工した石を並べて遺跡をつくった。砂浜を削って入り江をつくった。なだらかな崖を削って断崖絶壁にした。丘を山にした。火山がいいとララバウは言ったが、却下した。そこまで深くは掘れない。それに噴火させて全てを台無しにはしたくない。

「クライマックスにはいいかもな」

すっかり日に焼けた兼田が言った。

「クライマックス」

ララバイが嬉しそうに繰り返した。

いつ、と私は二人に尋ねた。

いつがクライマックスなんだ。

「さあね」「さあ」

二人して惚けた。

いい歳したおっさんが、である。

木を植える作業に戻った。ここには鬱蒼とした森が欲しい。植えた後は生長するのを待たなければならない。

五年待った。

森が出来た。根元には腐葉土。食虫植物もいる。蔦も這っている。

「パーフェクト」

ララバウが流暢な英語で言った。

この頃にはもう通訳は必要なくなっていた。私と兼田はとつくに現地語をマスターしていた。ララバウはもっぱら力仕事要員として活躍していた。

「さあ」

兼田は言った。

「次は、何だ」

視線が私に集まった。

決まっているだろう。

「宝だ」

計画のためには準備期間が必要だった。
まず噂を流した。

「怪盗がいる」

失笑を買った。

今の世に、怪盗なんて。

カクテルドレスを着た女性たちは、くすくすと笑った。そんなことよりも、私と踊りませんこと。夢見人さん。

私たちはそれでも噂を流し続けた。

一年も経てば、どんなに荒唐無稽な話でも信憑性を帯びる。

二年も経てば、怪盗は実在するようになる。

三年も経てば、ゴシップ誌が特集を組むようになる。

四年目に、私たちは計画を実行した。

「怪盗役は俺だろう？」

ララバウは得意げだった。

構わない、と私は言った。

兼田は少しだけ不満をこぼした。

「じゃあ、俺たちは何なんだ？」

怪盗の仲間さ。

目立たないな。

そういう役が好きな人もいる。例えば私。

なるほど、と兼田は笑った。

怪盗の名前は『夢見人』とした。英語にするなら『ドリーマー』

だろうか。どっちにしろ格好付けすぎだ、と兼田は言った。

「だって怪盗だもの」

ララバウはマスクを付けていた。

仮面舞踏会にでも出るかのような、白い奇術師の仮面。

「怪盗は精一杯格好付けなきゃ」

その通りだ。

まったくその通りだ。

今さら恥ずかしく思っくらいなら、あの百万はないだろう、と私は兼田に言った。

負けたよ、と兼田は頭を振った。

さあ、宝を手に入れようぜ。

世界で十二番目くらいの富豪である。

ベストだ、とララバウは言った。

一番は駄目だ。そもそも不可能だ。二番も無理だ。三番もきつと無理だ。一桁台は難しい。今の俺たちには十二番目くらいがベストだ。

兼田もこの点に関しては同意していた。

世界で十二番目くらいの富豪の家から、宝になり得るものを盗む事にした。

予告は出した。

「怪盗なもの」

格好付けなきゃ。

屋敷には警察と警備員が満載だった。

怪盗は実在する。私たちが実在させた。四年前だったら笑って捨てられた予告のカードは、今はこれだけの警察と警備員を動かすだけの力を持つ。

報われたよ。

カクテルドレスがトラウマなのさ、と兼田は言った。

予告時間ぴったりに、ララバウが屋敷に潜入した。

捕まった。

予定通り。

兼田がララバウを助けるために屋敷に潜入した。
捕まった。

予定通り。

二人にとっては想定外だろうが、私にとっては予定通り。
こうなることは、二十五年前から分かっていた。

裏切りじゃあない。

これは約束なのだ。

たった一人との約束なのだ。

二人の侵入経路をリークしたのは別名の私だ。

別名の私は十二番目の富豪から褒美を貰うことになった。

かの有名な「怪盗」を退けた値千金の情報である。何でも欲しい
ものを言え、と十二番目の富豪は言った。

宝石がいい、と別名の私は言った。できればそこに見えている安
物の宝石が。

そんなものでいいのか、と十二番目の富豪は言った。

それでいいのです。

それがいいのです。

別名の私は安物の宝石を受け取った。

宝だ。

いや、まだ宝じゃない。

これから宝にする。

十年かかった。

もともと鉱石にたいした価値なんかない。人間が勝手に、比較的
綺麗な石に、ゼロのいっぱいつく値段を付けただけである。

人間が決めたことは、人間なら変えられる。

私は世界の宝石事業を裏から微細に操作して、自分の持っている

鉱石の値段を釣り上げた。さらに自分の宝石はかの十二番目の富豪から譲り受けたものと吹聴し、誰にも売らない、決して売らない、と触れ回った。

決して売らないのだ。

この宝石は絶対に売らない。

他の人の手には触れさせない。

一つ言葉を吐くたびに、安物の宝石の値段は一ドルずつ上がっていった。

百回吐けば百ドル、千回で千ドル、一万回で一万ドルだ。

私一人で吐くには少々辛い。しかし私が言葉を吐けば吐くほど多くの人間の耳に入る。私の言葉を聞いた人間は、他の人間にも同じ言葉を吐く。それもカウントに入る。

千万回なんて、十年あれば十分に達成可能である。

売らないのだ。

絶対に売らないのだ。

今はこの言葉も別の効果を持つ。

宝石よりも、私自信の存在価値を上げる。

何処々に住んでいる、何々という名前の人物が、世界一高価で世界一美しい宝石を持っている。

それは決して他の人の手には渡らない。

何々という人物がずっと持っている。

決して競売には出ない。

欲しい。欲しい。欲しい。

そんな声が世界に満ちているのを感じた。

欲しい。欲しい。欲しい。

世界中のメディアが私と私の宝石を取り上げた。

カメラに向かって私は言う。

死ぬまで手放さない、と。

この宝石が欲しければ、私を殺せと。

心の底から欲しいと願う人物が現れるまで、私は五年も待つ羽目になった。

銃を突きつけられた。

「宝石を渡せ」

こめかみに冷たい銃口の感触を感じる。
心地良い。

「ここにはない」

私は答える。

サングラスをかけた男は聞く。

「どこだ」

男はララバウに少し似ている。
握手をした砂浜を懐かしく思う。

「どこだと思う？」

「お前に質問する権利はない」

「どうしても？」

ぐい、と銃口が食い込んだ。

兼田ならちゃんと付き合ってくれるのに。

「言え。言ったら解放してやる」

この世から。

分かっているよ。

約束は守るよ。

この男が子供であることを願う。

「宝島の話しよう」

私はそう切り出した。

「私の高校時代の友人はこんなことを言ったんだ」

十分かった。

宝島をつくるのには四十年近くかったのに。

宝島の話をするのには十分で済む。

弾丸が私の脳を貫いた。

死体の私は、きっと少しだけ涙を流している。
今だから。

その後のことは、当然ながら、知らない。

「二千万残っているが、どうするラバウ」

「家を買って、犬を買って、釣りでもしながら、余生を楽しく過ごす」

「馬鹿言えよ」

「割と本気だったんだがね」

「知ってるのは、世界で俺たち二人だけなんだぜ」

「それって凄いこと？」

「凄いことさ。今の世界をってみろよ。テレビでも新聞でも、宝島の話題で持ちきりだぜ。すでに何千人もの人間が宝島を探して船を出している」

「でもどうせ半年も経てば見つかったちゃうよ。現代だもの。人工衛星に囲まれた地球に、見つからない場所なんてないよ」

「いいんだよ。それが奴の望んだことなんだから」

「違うでしょ、あの人の高校時代の友人が」

「いいや」

「え？」

「他人との口約束を、四十年も守れるもんか」

「それもそうか」

「さて、話は戻るが、二千万でどうする」

「怪盗『夢見人』を続けようか？」

「素晴らしい案だが、却下だ」

「残念」

「俺の案を言っていていいか？」

「どうぞ」

「クライマックスをつくらないか？」

「クライマックス！ いいね！ そいつはいい！ ベストだ！ 兼

田！ それはベストな案だ！ 噴火させよう！ 火山をド派手に！」

「だろう！ さあ、用意しようぜ！ ララバウ、ボートを出せ！

衛星に捕まらないうちに、さっさと行くぞ！ クライマックスだ！

これからクライマックスだ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8867z/>

宝島をつくる人

2011年12月27日22時51分発行